青が消える（村上　春樹）

アイロンをかけているときに、青が消えた。青はだんだんかすんで薄くなっていって、それからすっかり消えてしまった。ちょうど機械のバッテリーがあがってしまったときみたいに。あるいはまるでオーケストラの指揮者が演奏の途中で気を変えて、突然指揮棒を振るのをやめてしまったみたいに。メロディーが中断したあとも、いくつかの楽器はまだ名残惜しそうに断片的な音を出していたが、それもやがて力なく消えて、あとには居心地の悪い沈黙だけが残った――という風に。

そのときアイロンをかけていたのはたまたま青とオレンジのストライプのシャツだったので、青が消えたことに僕はすぐに気づいた。最初は――同じ立場に置かれたら誰だってきっとそう思うはずだ――自分の目がどうかしてしまったのだろうと思った。神経を集中してじっとひとつのところを見ていたせいで、視力が一時的に狂ってしまったのだろうと。僕はアイロンのスイッチを切り、そのシャツを持ってもっと明るい部屋に移動した。そしてソファーに腰をおろしてしばらく目を閉じ、何度か深呼吸をし、それから目を開けてシャツをもう一度よく見てみた。でも同じことだった。そこにはもう青は存在しなかった。僕が手にしているのは、オレンジと白のストライプのシャツだった。かつて青であった部分は、棍棒で殴られて記憶を失ってしまったようなとりとめのない白にとって換わられていた。

僕はそのシャツを長いあいだ身動きひとつせず眺めていたのだが、どれだけ眺めたところで青はもう戻ってはこなかった。僕は寝室のクローゼットの中を見てみることにした。僕はそこにいくつかの青の服を持っていた。青いシャツや、青いネクタイや、青いスーツ。淡い青から深い青まで、僕は青という色が昔から好きだったし、みんなも僕には青がよく似合うと言った。でもそこにはもう青はなかった。それらはみんな白いシャツや白いネクタイや白いスーツに変わっていた。僕は引き出しの中も覗いてみた。そこには青いTシャツがあり、青いセーターがあり、青いスカーフがあるはずだった。でもそこでも事情は同じだった。それらはみんな、まるで歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白に染まっていた。

それから僕は書斎に行って、引き出しからハワイに旅行したときの写真アルバムを出してみた。そこには僕とガールフレンドが、水着姿で海岸に寝ころんでいる写真がたくさん入っているはずだった。白いビーチ、青い海、椰子の木。僕らは去年そこに二人で旅行に行ったのだ。でもそこにはもう青い海の姿はなかった。サングラスをかけてマイタイのグラスを手ににっこりと笑っている僕らの背後にあるのは、まるでシベリアの氷原のような茫漠とした白い広野だった。

青が消えてしまったのだ。

でもそれに対してどう対処すればいいのか、僕には見当もつかなかった。僕はひとりぼっちだった。そしてそれは1999年の大晦日の夜だった。新しいミレニアムを迎える記念すべき夜だった。世界中の人間はひとり残らずみんなどこかのパーティーにでかけていた。家に残ってひとりでシャツにアイロンをかけている人間なんて僕くらいのものだ。僕は少し前にガールフレンドと喧嘩別れをして、それでものすごく落ち込んでいたから、とてもパーティーにでかける気になんてなれなかったのだ。年号が2000年になったからといっていったい何が変わるというのだ、と僕は思った。そんなものただの日付の違いにすぎないじゃないか。カレンダーを一枚めくるというだけのことじゃないか。それで世界が何か変わるっていうわけでもないんだ。くだらない。

そんなわけで僕はひとりで家に閉じこもって、他にやることもないからシャツにアイロンをかけていた。そして青が消えたのだ。

僕は青の消滅について何かの情報が得られないものかと、何人かの友人に電話をかけてみたのだが、誰もつかまらなかった。最後に仕方なく、別れたガールフレンドのアパートに電話をかけてみた。電話には知らない男が出た。どうやら僕のガールフレンドの部屋では賑やかなパーティーが繰り広げられているようだった。ロック・ミュージックが大きな音でかかっていた。そしてそれにも負けないくらいの大声で人々が語り合っていた。僕はその男に向かって大きな声で僕のガールフレンドを出してくれといった。

「楽しんでいるところを邪魔して悪いんだけど、ちょっと確かめてほしいことがあるんだ」と僕は彼女に言った。「ひょっとして、君のまわりで青が消えていないかな？」

「青ってなによ？」と彼女は半分喧嘩腰で言った。

「色の青だよ」と僕は説明した。「海の青、空の青。実はさっきアイロンをかけている途中でシャツの青が突然消えちゃったんだ。シャツだけじゃなくて、家中の青という青がみんな消えちゃったんだ。でもそれが僕の家の中のことだけなのかどうか、わからないんだ。だから君のところはどうなのか知りたかったんだ。青がそこにまだあるかどうか」

「用事はそれだけなの？」

「そう」と僕は言った。

「あなたってどうしてそんなに辛気臭い人生を送らなくちゃならないの？」と彼女は言った。「よく考えてごらんなさ

いよ。今日は二十世紀最後の夜なのよ。一生に一度あるかないかのことなのよ。だから世の中の人はみんな目一杯楽しんでいるんじゃない。耳を澄ませてごらんなさい。みんなが楽しんでいる音が聞こえるでしょう？なのにどうしてあなたはわざわざこんなときに、青がどうした、アイロンがどうしたなんてロクでもない話を私に聞かせなくちゃならないのよ。青がなくなって、それがどうだっていうのよ。なんでそんなことで私のところにわざわざ電話してこなくちゃならないのよ」

そして彼女は電話を切った。

僕はコートを着込み、外に出てみた。ぴりっと寒くはあるけれど、雲ひとつない気持ちの良い冬の夜だった。時計は十一時半を指していた。僕は家を出るとまっすぐにブルーラインの地下鉄の駅まで行ってみた。ブルーラインは何もかもがブルーでできている。電車もブルーだし、駅員の制服もブルーだし、駅の壁だってブルーなのだ。そうしておけばこの立体迷路のような東京の地下鉄で乗客が迷うこともないだろうというのが、彼らの言い分だった（もちろん何をしようとみんな結局迷ったのだが）。でも今では、ブルーラインの何もかもが白に変わっていた。白い電車が白い壁の中を走り、白い制服を着た駅員が白い切符を売っていた。それは僕に古い記録映画で見たスターリングラードの冬季攻防戦を思い出させた。

「青はいったいどうしたんですか？」、切符売り場の近くで機械の修理をしていた白い駅員に僕は聞いてみた。「青にいったい何が起こったのですか？」

「政治のことは私に聞かないでください。私はただの駅員です」と駅員は早口で言った。

「ということは、これは政治のせいだと言うんですか？政治のせいで青がなくなったんですか？」と僕は聞いてみた。

「だから政治のことは私に聞かないでくれと言っているじゃありませんか」と彼は言った。そして彼は被っていた白い帽子を手に取って、それを床に投げつけた。「あなたは私にいったい何を求めているんですか。私は何も知りません。そういうことはもっと偉い人に聞いてください。中央コンピューターに聞いてください。私は青のことなんてこれっぽっちも知らないんですよ。私はただ言われたとおりに働いているだけです」

僕はあきらめて、べつの青を探してみることにした。パブロ・ピカソの画集があれば〈青の時代〉のページを探せるんだがなと思った。でももちろん大晦日の夜には書店は開いていない。あるいはアメリカかフランスの旗を探してもよかった。そうすれば青が世界にまだ残っているかどうかわかるはずだ。しかし東京のいったいどこに行けばアメリカかフランスの旗が見られるのだろう？

時計は十一時四十五分を指していた。時計の針を見ているうちに、僕の不安はだんだん高まってきた。こんな風に青という色を失ったまま――そして僕以外の誰ひとりそれについてとくに心配もしていない（僕にはそう思えた）まま――新しいミレニアムに入ってしまったら、なんだかすごくよくないことが起こるんじゃないかという気がしたのだ。

僕はクレジット・カードを使って公衆電話から内閣総理府広報室に電話をかけ、総理大臣を呼び出してみた。もちろん総理大臣が本当に電話に出てくるわけではない。国民の疑問や苦情に、総理大臣がひとつひとつ個人的に答えてくれるコンピューター・システムをＮ社が新しく作り上げて、実用化されたのだ。声も合成だが、本当に総理大臣の声に聞こえる。

「青はまことに美しい色であります、岡田さん」と総理大臣の声は静かに言った。「ご存じでしょうか。私の好きな短歌にこういうものがあります。『白鳥は哀しからずや／空の青／海のあをにも染まずただよふ』、なんという美しい短歌でしょう、岡田さん」

と僕は電話に向けて怒鳴った。

「ねえ総理大臣、青がなくなってしまったんですよ」と僕は電話に向けて怒鳴った。

「かたちのあるものは必ずなくなるのです、岡田さん」と総理大臣は言い聞かせるように僕に言った。「それが歴史なのですよ、岡田さん。好き嫌いに関係なく歴史は進むのです。石油だってなくなります。ウラニウムだってなくなります。コミュニズムだってなくなります。オゾン層だって、二十世紀だって、ジョン・レノンだって、神様だってなくなります。スイング・ジャズだって、ＬＰレコードだって、人力車だってなくなります。岡田さん、どうして青がなくなってはいけないのですか、岡田さん。明るい面に目を向けなさい。何かがひとつなくなったら、また新しいものをひとつ作ればいいじゃありませんか。その方が経済的だし、それが経済なのですよ、岡田さん」

僕はわけのわからないままどこまでも通りを歩いた。やがて町中の時計が十二時を打った。みんなが一斉に歓声をあげ、歌を歌ったり、物を投げたり、抱き合ったり、シャンパンを抜いたりした。新しいミレニアムがやってきたのだ。誰も消えた青のことなんか気にしてはいなかった。

でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。**そしてそれは僕が好きな色だったのだ。**